

第31回（1999年度）サントリー音楽賞は

三善 晃氏に決定

財団法人 サントリー音楽財団は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第31回（1999年度）受賞者を三善 晃氏に決定しました。

●選考経過

1. 2000年1月10日（月・祝）午前10時より東京・丸の内の東京會館において、選考委員10名により第一次選考を行い、「候補者」を選定した。
2. 引き続き3月15日（水）午前10時より、東京・千代田区紀尾井町のザ・フォーラムにおいて選考委員10名により最終選考会を開催、慎重な審議の結果、第31回（1999年度）サントリー音楽賞受賞者に三善 晃氏が選定され、同日午後開催の理事会において正式に決定された。

※選考理由は別紙の通り。

●賞金は700万円。

●選考委員は下記の10氏。

磯山 雅・岩井宏之・小石忠男・白石美雪・武田明倫  
丹羽正明・根岸一美・藤田由之・船山 隆・三宅幸夫

（敬称略・50音順）

#### ＜贈賞理由＞

数々の名作・秀作を世に送り出してきた三善晃氏の初のオペラ「遠い帆」。いわゆる慶長遣欧使節の中核であった仙台藩士支倉常長と、フランシスコ会修道士ルイス・ソテローの2人を主たる登場人物とする「遠い帆」の作曲にあたり、氏はヨーロッパの伝統的なオペラに拘束されない日本独自の舞台音楽の創出を目指し、それを現実のものとした。

1999年3月に仙台で初演、次いで4月に東京で再演されたこの作品は、声楽面では支倉やソテロよりも合唱を重視、合唱が登場人物たちの行動の背景を説明する方法を採っている。作品の主題は、「運命に操られた人々」。支倉は初め受動的に自身の運命を受け入れたにすぎないが、スペイン到着後、その運命を肯定的に受け入れ、キリスト教に改宗する。ソテロは禁教後の日本に再度潜入して捕えられ、火刑に処せられる。彼は、帰国してほどなく没した支倉のもとに、殉教者として旅立ってゆく。

作曲家はここで、叙事的にしてドラマティックな音楽を繰り広げ得たであろう。だが三善氏はそうはせず、支倉とソテロ、それぞれの内なる世界で引き起こされた目に見えぬドラマ―外在する対立でなく、内在する対立を描き出す。ここに“三善オペラ”の神髄がある。

氏はかつて混声合唱とオーケストラのための三部作、「レクイエム」（1972）、「詩篇」（1979）、「響紋」（1985）を書き、声と日本語とオーケストラの3つを、独自のやり方で結びつけてみせた。独唱が加わり、さらに視覚的要素と動きも加わっている「遠い帆」は、三部作とどこかで通じている趣があり、デビュー以来氏が練り上げてきた技法のすべてが集約されている。代表作といって少しも過言ではない。

#### 〈略 歴〉

1933年東京生まれ。3歳の頃から自由学園の音楽教室でピアノを学び、小学校に入った頃から平井康三郎に作曲とヴァイオリンを師事した。51年東京大学文学部仏文科に入学。在学中の53年「ソナタ」が第22回日本音楽コンクール作曲部門第1位、54年「ピアノと管弦楽のための協奏交響曲」が第3回尾高賞、文化庁芸術祭奨励賞を受賞し注目される。55年給費留学生としてパリ音楽院に留学、アンリ・シャラン、レイモン・ガロワ・モンブランに師事。アンリ・デュティユーの影響も受ける。57年帰国、東京大学に復学し60年に卒業。このころから毎年のように話題の大作を発表しており、管弦楽、室内楽はもとより歌曲、特に合唱作品に優れた作品を生み出している。最近では、95年から98年まで「夏の錯乱」（95）、「罅つり星」（96）、「霧の果実」（97）、「焉歌・波摘み」（98）と毎年オーケストラ作品を発表、99年3月には初のオペラ「遠い帆」を発表して、大きな成功をおさめた。63年から桐朋学園大学で後進の指導にもあたり、74～95年まで桐朋学園大学学長を務めた。1999年12月芸術院会員となる。現在東京文化会館館長。

以 上